

調査班によるまとめ

支援機関が 自らの役割に より集中できる

同市が取り組むネットワーク支援のポイントについて、次のような3点を挙げたい。

- ①市が自ら第一線で目利き機能と結節機能を有するコンシェルジュとしての役割を担っている
- ②個々の支援機関が担う役割が明快である
- ③市と商工会議所間の役割区分を明確化している

所沢市が第一線で「目利き」と「つなぎ」の機能を発揮し、自治体として支援の前面に出ていくという決断を下すにあたっては、かなりの勇気が必要であったことが推測される。

また、その決断には、自らがコンシェルジュとしての役割を十分に果たせる組織となる必要があり、そのための地道な鍛錬を自らに課す必要がある。

しかし、それによって得られる果実が大きいことも確かである。

得られる果実としてまず考えられるのは、支援活動の詳細を把握できると共に、支援活動を時間軸と機能性の両面から総合的に俯瞰することも可能になるため、プロジェクトマネジメントが可能となり、非常に質の高い支援を創業者に提供できるようになることである。さらにこの効用は、時間の経過と共に、スキル強化と経験の蓄積にもつながっていくことになる。

次に考えられるのは、協力して

くれる支援機関に与える良い影響についてである。

ネットワークにおいて中心を成す自治体がコンシェルジュの役割を担う姿勢は、支援協力依頼を受ける他の支援機関にも、自ずと全力で支援にあたる緊張感が共有されることを期待できると思われる。

翻って、支援に協力する側の視点から同取り組みを見た場合にも、プラスの影響が考えられる。

その影響とは、協力する支援機関として、自分の果たすべき役割が具体的にはっきりと示されるため、創業者に対してピンポイントで有効な支援が提供可能となり、支援機関自身としても失敗リスクや無駄な労力の発生を低減できることから、安心感をもって支援に取り組むことができる点だ。

もう一つ指摘したいことは、同市が強い連携関係を持つ地元商工会議所との間においても、それぞれの役割を明確にすることによってメリットが生まれることである。

商工会議所は従来から創業支援を展開してきた経験を有し、会員事業者に対する経営支援ノウハウの蓄積があるため、新規色の濃淡に関わらず支援を提供することが可能である。

そのため、同市が新規色の濃い事業プランの具体化に力を注ぎ、商工会議所はそれ以外をカバーするという一定の線引きをすることで、互いが自分の役割に集中できるというメリットにつながる。

ただ、新規色の濃い事業プランが継続的に地域において発現する保証はなく、発現しない状況が今後生じた場合の対応については検

討が必要となろう。

市自ら敢えて 手間のかかる役割を 担う

同市が取り組む活動から我々調査班が学ばせていただいたことは、自治体が自身の支援スキルを高めるという選択が可能だという発見であり、その選択が、実際に創業者にとって創業に向けた強い動機づけにつながるという事実であった。

先に触れた創業者の次の言葉からも大きなヒントがもたらされたと感じている。

「当時は何をどうすればいいか、誰に相談すればいいかさえ、見当が付きませんでした」

創業を志す方の中には、そもそも「どこ」に行き、「何を」相談すればいいのかさえ迷う方が存在するのである。そういった方にとって頼れる存在となるために、敢えて手間のかかる「目利き」と「つなぎ」の役割を担うことを選択した所沢市の決断に、我々は支援者としての強いこだわりを感じ取ることができた。